



〈資料〉最近十五ヶ年に於ける比律賓輸出貿易の推移

川田, 富久雄

(Citation)

国民経済雑誌, 71(4):103-110

(Issue Date)

1941-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/00055599>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00055599>



最近十五ヶ年に於ける

比律賓輸出貿易の推移

一

比律賓は現在農業國であり、國內の工業は未發達の狀態にある關係上、その農産物（或ひは礦産物）を海外に輸出し、自國內に於て生産せられざる數々の工業製品を輸入せねばならない。現在比島の主要産業に於ける生産高と輸出高との比率は砂糖九三%、アバカ（マニラ麻）九〇%、コ、椰子油八六%、シガー六六%、葉煙草四七%、コブラ四五%となつて居る。かくの如く生産が主と

して輸出を目的として行はれて居るため、これ等生産物の輸出の維持發展は比島經濟にとつて死活的重要性を帯びるものであるが、以下主要輸出品につき最近十五ヶ年間に於ける輸出貿易の推移を概観しよう。

二

過去十五ヶ年（一九二六年—四〇年）に於ける比律賓外國貿易の特徴として次の如き諸點を擧ぐることが出来る。

一、比律賓の外國貿易は大體に於て向上的趨勢を示して居ること。

一九二九年以後の世界不況期に比島の外國貿易は萎縮し、一九三三年には最低に達し、貿易總額は三億四千六百萬ペソに迄下落したが、其後は着々と恢復し、一九四〇年には五億百萬ペソに達した。輸出が最も低下したのは一九三五年であり、一億八千八百萬ペソを示し、輸入が最低を示したのは一九三三年で一億三千四百萬ペソを示した。それ以後は輸出入共に堅實に増加し、一九四〇年には輸出は二億三千百萬ペソ、輸入は二億六千九百萬

ペソに達した。此の増加は價格の騰貴にもよるけれども、貿易數量の増加も亦著しいものがある。

二、米國が比島の最も重要な市場であること。

一九二六年より四〇年迄の期間に於て米國は年々比島輸出總額の四分の三を吸収して居るのである。比島輸出貿易中にて米國の占むる割合は最低は一九二六年の七三・〇六%、最高は一九三六年の八六・六九%であつた。一九四〇年に於ける各國の割合は米國八一・六〇%、日本五・六八%、英國二・三二%、支那一・一九%であり、比島に對する米國の重要性を遺憾なく示して居る。

三、米國が比島に對する最も重要な供給者であること。

此の十五ヶ年に於ける比島の米國よりの輸入高は一九三七年の五八・〇六%を最低とし、一九四〇年の七七・六八%を最高として居る。比島は日本を除けば米國商品の東洋に於ける最重要市場であり、その對米輸入額は年平均一億四千二百萬ペソに達して居る。昨年は戰爭のため、歐洲よりの輸入が杜絶したことにより、對米輸入額

は二億九百萬ペソに及び、米比貿易開始以來の最高記録を示した。しかして、米國の輸出相手國として比島は第七位を占めて居る。

四、金塊の輸出が比島貿易に於て重要な地位を占めつゝあること。

過去十五ヶ年に於ける興味深い發展の一つは金塊の輸出が著々と増加せることである。一九二六年には金塊の輸出額は三百八十餘萬ペソであり、輸出總額の僅かに一%に過ぎなかつたが、十五ヶ年後の一九四〇年には金塊輸出額は七千五百八十萬ペソに達し、その金額に於て輸出商品中首位を占むる砂糖に次いで居る。現在の増加率を以てすれば金塊が結局比島輸出統計中首位を占むるであらう。金塊は悉く米國に仕向けられる。

五、貿易尻は一般に比島にとつて順であること。

一九二六年より三七年に至る十二ヶ年に比島は出超を續けた。出超額の最低は一九三一年の九百五十萬ペソであり、最高は二七年の七千九百四十萬ペソであつた。三八年以來は比島の商品貿易は入超を示し、三八年には三

千三百萬ペソ、三九年には三百萬ペソ、四〇年には三千九百萬ペソとなつて居る。商品貿易の出超は全く米國との貿易によるものであり、他國との貿易は大體に於て入超を示して居る。

三

最近十五ヶ年に於ける比島輸出貿易の大勢を概観すれば一九二六年には二億七千三百萬ペソであり、其後連年増加を示し、二九年には三億二千八百萬ペソとなり、最高記録を示した。其後世界不況による主要輸出品の相場下落のため、輸出額は年々減少して一九三五年には最低に達し、一億八千八百萬ペソとなつたが、其後は輸出は徐々に改善し、過去五ヶ年間の平均は二億五千五百萬ペソとなつて居り、昨年の輸出額は三億九百萬ペソであつた。

今次歐洲大戰は比島の輸出貿易に大なる打撃を與へた。比島輸出物産の價格は戰爭のために著しく下落した。歐洲方面では、英吉利、伊太利、西班牙及び瑞西への輸出が増加したけれども、白耳義、丁抹、佛國、獨逸、

和蘭、諸威及び瑞典への輸出に於て減少が甚しかつたため、歐洲全體としては三八%の減少を示した。歐洲への輸出が激減せる結果、比島は益々米國市場にその販路を求めねばならなくなり、一九四〇年に於ける米國の比島輸出貿易に於て占むる割合は金銀を除けば七七%、金銀を含めれば七九・九六%を占めて居る。前年はそれ〴〵七一・九五%及び八二・四六%であつた。

歐洲への輸出不振を償ふものとして、濠洲及關東州を除く東洋への輸出増加が見られ、その額は一九三九年に比し二九%の増加を見て居る。

次に主要輸出品の各についてその輸出貿易の推移を見れば左の通りである。

一、砂糖 一九二〇年以來、砂糖は比島輸出品中の首位を占めて居る。二六年に於けるその輸出額は六千四百萬ペソであり、以後漸増して三四年には一億三千萬ペソと最高記録を示した。此の輸出増加は、しかしながら、一九三五年より發效する割當制限を見越して行はれたるものであり、従つて三五年には僅かに前年の半ばたる六

千五百萬ペソに達したのに過ぎなかつた。以後三六年には一億二千三百萬ペソ、三七年には一億一千五百萬ペソ、三八年には一億ペソ、三九年には九千九百萬ペソ、四〇年には九千百萬ペソと漸減を見せて居る。

砂糖は事實上全部が米國に輸出せられ、對米無稅制額は八十五萬英噸（そのうち分密糖は五萬英噸以下たることに）に限定されて居る。

二、アバカ（マニラ麻） 比島はアバカの世界的主要產地であり、一八九九年より一九一八年までアバカは比島輸出物産中の首位を占めて居た。一九二六年より四〇年までの間にアバカは第二位より第四位の間にあつた。

一九二六年に於けるアバカの輸出額は六千四百萬ペソであつたが、以後相場下落のため、輸出額は減少し、三年には一千萬ペソにまで減少した。其後輸出額は増加して三七年には四千三百萬ペソに達したが、翌年は二千萬ペソに減じ、三十九年には二千三百萬ペソ、四〇年には二千五百萬ペソを示した。輸出金額は右の如く變動したが數量は大體同一水準にあり、比律賓コモンウェルス

創立以來、アバカの輸出量は堅實なる増加を示して居る。

三、煙草及同製品

煙草及同製品は一九二六年より四〇年まで第五位乃至六位を占めて居るが、二六年に於ける輸出額は一千七百萬ベソであり、二九年までは大體その額を維持したが、その後漸減して三四年には一千萬ベソに下落した。その後三五年に稍回復したが三八年には九百九十萬ベソに低落し、一九一六年以來の最低記録であつた。翌年は一千四百萬ベソに増加し、四〇年には一千萬ベソとなつた。

煙草及同製品の輸出額の約半ばは米國に仕向けられ、此の十五ヶ年に於ける對米輸出の割合は四五乃至六四%であつた。對米煙草輸出の八五%まではシガーであり、シガーの八九%までは米國に輸出される。比島のシガー製造業の發達は主として米比自由貿易制によるものであるから、米國が外國煙草に課する二五%の從價税と、一封度につき九ベソの輸出税が課せられるならば比島のシガー業は危殆に瀕するであらう。

最近十五ヶ年に於ける比律賓輸出貿易の推移

四、乾コ、椰子

乾コ、椰子は米比間の自由貿易によつて興つた輸出品であり、その輸出額の九九%までが米國に仕向けられる。一九二二年にはじめて輸出せられ、第十二位を占めたが、二六年には第七位に進み、以後四〇年まで第五位乃至第九位にあつた。

一九二二年に於ける輸出額は四十萬ベソであり、九・九三%が米國に仕向けられた。米國の乾コ、椰子輸入税は一封度につき二仙であつたが、其後外國品に對しては三仙半の課税が行はれたから、比島の乾コ、椰子の輸出は激増した。一九二六年には輸出額は五百萬ベソ、二八年には七百萬ベソを示したが、三二年には底をついて三百萬ベソとなつた。後漸次恢復し三七年には一千二百萬ベソと最高記録を示した。其後は價格低落せるため輸出額は年平均七百五十萬ベソ前後である。比島の乾コ、椰子は米國以外には重要市場がないから、一度び關税の保護が撤廢されたならば乾コ、椰子の製造業は大打撃をうけるであらう。

五、コブラ

比島のコブラ産額は世界總産額の約三四

%を占めるが、その輸出額は一九二六年より四〇年迄の間に於て第二位より第四位までの間にあつた。二六年にはコブラの輸出額は三千七百萬ベソであつたが、二八年には四千五百萬ベソに達して最高記録を示した。爾來コブラの輸出は不況の打撃をうけて減少し、三二年には僅かに一千萬ベソとなり、二八年に比し實に七七%の下落を示したのである。其後、輸出額は恢復し、三七年には三千百萬ベソに達したが、四〇年には相場下落のため一千八百萬ベソに低下した。

コブラの輸出は大部分米國に向けられ、米國のコブラ輸入額の九五%を占めて居る。二六年より四〇年迄に至る間に於ける比島コブラの對米輸出は三四年の四五%を下限とし、三七年の九〇・二%を上限として居る。米國以外のコブラの買手は丁抹、佛國、獨乙、和蘭、メキシコ、諸威、西班牙、瑞典、ジブラルタル、土耳其、智利日本及び埃及である。一九四〇年にはじめてアジャ・ロシヤ及スペイン領アフリカが比島コブラを買付けた。

六、コ、椰子油 コ、椰子油も亦、米比自由貿易の基

礎の上に發達した輸出品である。對米輸出は一九二九年の九九・〇三%を最高とし、三四年の九四・一四%を最低として居る。一九二六年より四〇年迄の期間に於てコ、椰子油の輸出品中に於ける順位は第二位乃至第四位であつた。一九二六年にはコ、椰子油の輸出額は四千四百萬ベソであつたが、二九年には五千八百萬ベソとなり、最高記録を示した。以來輸出額は減少し三四年には底をつき僅かに一千三百萬ベソとなつたが、漸次恢復し三七年には四千百萬ベソとなつたが、其後減少して居る。

比島經濟調整法 (Philippine Economic Readjustment Act) 別名タイディングス・コシアルコウスキー法 (Tydings-Koialkowski Act) によつて對米無稅輸出割當基準量は二〇萬英噸と定められ、一九四一年以後年々五%づゝ遞減するものとした。

七、刺繡 前大戰の際、米國が從來輸入せる佛國及び白耳義よりの供給が杜絶せるため、比島の刺繡業が刺戟され、關稅の保護の下にその生産高の九割以上が米國に輸出された。輸出品中に於ける順位は最近十五ヶ年に於

て第五位乃至第八位を占めた。一九二六年に於ける刺繡の輸出額は一千百萬ペソであつたが、二九年には千二百萬ペソに達し、其後下落して三三年には三百萬ペソと底をついたが、其後漸次恢復し最近三ヶ年間は年平均約一千萬ペソを示して居る。

刺繡の輸出は主として米比間の自由貿易によるため、關稅の保護なしには刺繡業は繁榮することは出来ないことは明かである。比律賓經濟調整法によつて輸出稅課稅標準價格の決の定に當つては原料布が米國製である場合にはその價額を控除すべき旨が規定されて居る。

八、木材 此の十五ヶ年間に於ける木材の輸出額の順位は第七位乃至第九位であり、二六年には五百十萬ペソであつたが、一九三二年には百六十萬ペソに下落し、一九二三年以來の最低記録を示したが、其後漸増し、三七年には七百八十萬ペソとなり、一九二九年の記録を破る高額に達した。輸出先は米國、日本、英國、濠洲、英領アフリカ及び支那である。米國は從來より主要なる買手であつたが、最近その割合は著しく低下した。

最近十五ヶ年に於ける比律賓輸出貿易の推移

九、網索 最近十五ヶ年に於ける網索の輸出額は第十位乃至第十二位であつた。二六年に於ける輸出額は二百八十萬ペソであつたが、二九年には三百八十萬ペソに達して最高記録を示したが、其後漸減し三二年には底をつき僅かに百三十萬ペソとなつた。爾來恢復を續け四〇年には三百四十萬ペソとなつた。

一九二六年に於ける比島網索の對米輸出は四六・一％であつたが三三年には六二・五％となつたが、三五年コモンウェルスの成立以來、對米輸出の割合は減少したが三九年及び四〇年には著しく改善された。即ち三五年五四・一％、三六年三八・三％、三七年三四・五％、三八年二七・一％、三九年三八・三％、四〇年四九・九％を示して居る。比島經濟調整法によつて無稅割當基準は六百萬封度とし、一九四一年一月以降毎年基準量の五％づゝを遞減することと規定された。

次に比島重要輸出品の金額及順位の推移を表示すれば左の通りである。

最近十五ヶ年に於ける比島重要輸出品輸出額 (單位百萬ペソ)

	砂糖	アバカ	煙草及其製品	椰子	コブラ	コ、油、椰子	刺繡	木材	綱索	總額 (其他共)
一九二六	六四・四一	六四・二二	一一・二五	五・五七	三七・七四	四四・六三	一一九・六	五・一八	二・一八	二七・三七
一九二七	一〇〇・五一	五九・三二	一一・八五	五・七	三八・三四	四九・六三	八〇・六	五・五八	三・一一	三二・一一
一九二八	九五・〇一	五三・一二	一二・一五	七・四七	四三・〇四	四六・九三	九〇・六	六・二八	三・一一	三三・〇一
一九二九	一〇六・四一	五八・八三	一一・五五	七・〇九	四二・一四	五八・三二	一二〇・六	七・一八	三・一一	三三・〇一
一九三〇	一〇四・四一	五六・八三	一五・六五	五・九七	二六・八四	三三・三二	七・一六	五・四八	三・一〇	三三・三三
一九三一	九八・九一	一七・八四	一四・八五	三・六八	一八・三三	三〇・〇二	五・三六	三・六七	一・一〇	三三・九
一九三二	一九・六六	一〇・〇五	一二・八三	三・二七	一〇・二四	一五・三二	六・六六	一・六七	一・一〇	一〇・六
一九三三	二八・六一	一三・七四	一〇・三三	三・四七	一七・九三	一八・三二	三七・六	二・五八	一・一〇	二二・五
一九三四	二〇・八一	一七・三二	一〇・三三	四・七	一七・二三	一三・五四	五・一六	四・〇八	二・九	二〇・八
一九三五	六五・八一	二二・九三	一一・〇五	七・七	二二・九四	四・五二	一〇・一六	五・〇八	二・一〇	一八・四
一九三六	二二・八一	一四・一二	一〇・四三	八・七六	二九・九三	七・七四	八・五七	六・一八	二・一〇	二二・八
一九三七	二五・四一	四三・三二	九・九六	二・六五	三二・九四	四・〇三	七・八	七・七	二・一〇	三〇・五
一九三八	一〇〇・〇一	二〇・三三	九・九六	七・七	二二・五二	三・四三	一〇・二	五・六八	二・一〇	三三・五
一九三九	九八・三一	二二・七三	一四・五五	八・八七	二六・八二	一七・八四	一〇・七六	六・三三	三・一一	三六・〇
一九四〇	九一・九一	二五・三二	一〇・二五	七・二七	一八・八四	一七・七	九・一六	七・一八	三・四二	三〇・五

(註) 算用數字は順位を示す。

四

要之、比島の輸出貿易は米比自由貿易制の下に殆ど全面的に米國市場に依存せるものであり、一九四六年に行

はれる豫定の完全獨立以後に於てかゝる特惠的地位の喪失が比島に與ふる經濟的打撃は大なるものあらう。獨

立再檢討論が比島人自身の側より發せられ有力化しつつあるのは主として此故である。

(資料) Fifteen Years of Philippine Exports—Rise and Fall of Philippine Foreign Trade of Major Interest to Filipinos, by Cornelio Balmaceda, Philippine Journal of Commerce, June 1911. (川田富久雄)